

第10回世界微生物株保存会議報告 (The 10th International Congress for Culture Collections :ICCC-10)

渡邊 信

第10回世界微生物株保存会議大会長
国立環境研究所生物圏環境研究領域

第10回国際微生物株保存会議 (ICCC-10) が昨年10月10日～15日にかけてつくば市の国際会議場で、日本微生物資源学会 (JSCC) と世界微生物株保存連盟 (WFCC) の共催で、開催された。第1回のICCCが開催されたのは、1968年、東京であったが、その際、52カ国から526名の参加者があり、その成果は1970年のWFCCの結成と4年ごとのICCCの開催という形で結実した。ICCC-1の大会長であった飯塚先生が銀杏の葉をデザインした楯を作り、ネームボードにサインをして次の大会にひきついだ。これはその後大会の度に大会長にひきわたされ、第10回という節目の大会であるICCC-10でようやく生誕地にもどった。この楯の第10番目のネームボードには、私のサインがほられたが、ボードがいっぱいになったので、さらに10のネームボードが追加され、次の開催国であるドイツに引き継がれることとなる。このような歴史的背景をもとに、ICCC-10は39カ国及び2つの国際機関から483名の参加者があり、全体数では第1回にはややおよばなかったものの、外国からの参加者数は269名と過去最高であった。そのうち途上国あるいは経済移行国からの参加者は180名をこえていた。

本大会は、UNESCO-MIRCENS (Microbial Resources Center) の助成金、発酵研究所の助成、文部科学省の科学研究成果発表促進費、万博記念機構、花王芸術・科学財団、(財) サントリー有機化学研究所、岩谷直治記念財団、つくば市等から補助金を得た。途上国及び経済移行国から72名の研究者に対して9,559,580円のサポート、さらに先進国の23名の研究者に対して2,392,080円のサポートを行った。さらに、国立環境研究所、製品技術評価機構、農業生物資源研究所、理化学研究所がそれぞれのシンポジウムのプログラムをICCC-10に融合させたことにより、先進国・途上国から数多くの外国人研究者が招聘され、本大会にも参加、発表した。本大会は、これらの支援等がなければ決して成功しなかったといえる。この場を借りて、あらためて深謝申し上げる次第である。

本大会では微生物資源の収集・保存・提供・利用に係わる重要な課題に焦点をあわせた。農業、産業、環境、健康、医薬、基礎科学を含む様々な分野からの発表があった。大会のプログラムの概要は下記のとおりである。

- 1) 駒形先生による講演「Milestones in Japanese Culture Collections」：特に前述した楯の話は多くの外国人参加者の関心をひきつけた。
- 2) プレ・バンケット講演：Samson博士「100 years Centraalbureau voor Schimmelcultures」及び急用により参加・講演をとりやめたColwell教授の講演内容について駒形先生から紹介「Biocomplexity, Global Infectious Diseases, and the Role of Biological Resource Centers」
- 3) 特別シンポジウム：「Impact of genomics on microbiology」(コンビーナー：磯野) 及び「New paradigms of biological resource centers」(コンビーナー：Swings, 渡邊 & 菅原)
- 4) 12のシンポジウム：「Current advances in the species concept problems of microorganisms: Definitions, methodologies and practical applications」(コンビーナー：杉山 & Stackebrandt), 「Appropriate intellectual property rights for successful biotechnology-Present and future institutional, legal and economic aspects」(コンビーナー：Desmuth & 中原), 「A quest for novel microorganisms」(コンビーナー：鎌形 & Garrity), 「Biodiversity of fungi: Ecological, industrial and legislative perspectives」(コンビーナー：安藤 & Samson), 「Extremophiles and their applications」(コンビーナー：亀倉 & Ventosa), 「Algae on global environment and human welfare」(コンビー

ナー：渡邊 & Lee), 「Genetic and functional diversity of agricultural microorganisms」(コンピーナー：加来 & O'Donnel), 「The WFCC and international initiatives of BRC's」(コンピーナー：Swings & Smith), 「Probiotics for human health and animal production」(コンピーナー：辨野 & Lee), 「Biological resource centers and the network: the regional role」(コンピーナー：関 & Gandjar), 「Biosecurity and the role of biological resource centers」(コンピーナー：江崎 & Holmes), 「Human and animal cells」(コンピーナー：小幡 & 桑名).

- 5) スカーマン賞授賞講演：Hans-Josef Schroers 博士 (スロベニア)
- 6) 18 ポスターセッション：「CBD と IPR」(0 演題), 「バイオインフォマテイクス, データベース及びネットワーク」(15 演題), 「生物材料の保存」(9 演題), 「カルチャーコレクションとそのサービス」(43 演題), 「微生物の同定と検出」(14 演題), 「分類学, 系統学, 進化学」(34 演題), 「多様性と生態」(44 演題), 「菌類学」(12 演題), 「藻類学」(19 演題), 「一般及び応用微生物学」(29 演題), 「極限微生物」(6 演題), 「微生物共生と相互作用」(4 演題), 「植物関連微生物学」(10 演題), 「農業関連微生物学」(21 演題), 「食品微生物学と醸造」(8 演題), 生物治療と生物改変 (6 演題), 「医学分野の微生物学, 感染症及びバイオセーフティー」(3 演題). 合計 285 演題のポスター発表があり, 厳正な審査の結果, 下記 5 題がベストポスター賞として選定された.
 - ① Brockmann, E., K. Schlichter & C. Sarrazin: Specific detection and quantification of *Bifidobacterium animalis* subsp. *lactis* and *Lactobacillus acidophilus* from different environments by a fluorescent colony hybridization assay.
 - ② Blackburn, S., I. Jameson, C. Johnston, D. Frampton, S. Gallori, M.P. Mansor, P. Nichols, N. Parker, S. Robert, J. Volkman, C. Bolch, A. Negri, L. Llewellyn & M.R. Tredici: The CSIRO Collection of Living Microalgae: An Australian perspective on biodiversity and applications of microalgae.
 - ③ Tanabe, Y. & M.M. Watanabe: The impact of recombination to the genetic diversity of *Microcystis aeruginosa*.
 - ④ Honogoh, Y., M. Ohkuma, S. Trakulnaleamsai, P. Deevong, T. Inoue, C. Ongkhaluang, N. Noparatnaraporn & T. Kudo : Novel (sub) divisional lineages of bacteria found from the gut of termites.
 - ⑤ Lestari, Y., C. Andri & A. Tjahjoleksono: The capability of *Streptomyces* sp. PS1-4 in controlling bacterial pathogens on soybean plant in Indonesia.

本大会を一層活気付け, 有意義のものとし, 互いの交流を活発にしたのは, ICC-10 のプロシーディング「Innovative Role of Biological Resource Centers」(渡邊, 鈴木, 関編)を会議前に作り上げ, 登録時に参加者に配布できたことであろう。プロシーディングは3つのパートからなる。パート1は招待講演, JSCC のオープンセミナー, 特別シンポジウム及び12のシンポジウムに関して16章・78のフルペーパーを含んでいる。パート2は駒形先生及びSamson博士の特別講演のフルペーパー, パート3はポスター発表予定の312のアブストラクトを含んでいる。このプロシーディングには微生物リソースに関する最新の知見や取り組みが示されており, 参加者がプロシーディングを読みかつシンポジウムに参加して詳細な話を聞くことによって, 参加者の理解を深めかつ互いの議論を活発にしたといえる。プロシーディングが会が始まると同時に配布されたのは, これまでオランダでの大会であっただけであるが, これが今後のICCの常識となるように, 次回のドイツ大会でも是非実現してほしい。

ブリスベンで開催されたICC-9ではICC-10は南アかモロッコでという雰囲気が強かったが, ICC-10は是非日本で行いたいという意志だけは示しておいた。今まで, WFCCにはなかったICC誘致のプロポーザルを提出した結果, 他国からも類似のプロポーザルがでたことで, WFCC理事会で投票の結果, 一票差で日本に決定したという。その後, 組織委員会(委員長:渡邊), プログラム委員会(委員長:関), 募金委員会(委員長:辨野)を結成し, ICC-10の前年(2003年)の秋には国際組織委員会も開催した。本大会が成功に終わったことは, 前段階ですべてが順調に進んだことによる。各委員会の委員の先生に深く感謝したい。また, ICC-10事務局の皆さんには大変な労働を課してしまっただけで, 事務局の方の頑張りがないと本大会は決して成功しなかったと言える。笠井事務

局長を筆頭にして、広木、河地、Noel、田辺、大村、平林、板山、比嘉、小谷、武井、加藤、山本、恵良田、森、湯元、守家、石本の各氏の組織だった動き、柔軟な対応、親切なもてなしは、参加者の多くから高い評価をうけた。特に笠井事務局長の献身的な働きは、どんな言葉でもって感謝の意をいづくせないほど偉大なものであった。

最後に ICC-10 に参加したすべての方に感謝したい。参加者の質の高い科学的貢献は本大会を偉大な成功に導いた。参加者全員にとって、つくばでの1週間の滞在は楽しく、実のあるものであったであろうと信じる。そして、多くの研究者との科学的に濃密な議論ができ、楽しくかつ親密な出会いができたというすばらしいメモリーを携えて家路についたと信じる。

